

## 少女から女性へ

—キキの成長—

\* 武田京子

(二〇〇四年一月三〇日受理)

### I、はじめに

「魔女」という古典的なキャラクターを現代的な「小口貨物宅配システム」と組み合わせた、角野栄子作『魔女の宅急便』シリーズは、二〇〇四年第四巻『魔女の宅急便 その四 キキの恋』が刊行された。主人公が「魔女」である、という設定は、それだけで非現実のことと、とらえがちである。しかし、ファンタジー作品の中で主人公が「魔女」という職業をどのように実現していくかを語ることは、読者である子ども達にとって、生き方を模索する手がかりとしての意味のあるものになっているのではないだろうか。

本稿では、主人公キキの十三歳の旅立ちからの成長過程を追いながら、女性の自己形成過程のモデルとしての有効性について考察するとともに作品に託された作者のメッセージを解説する。

方法としては、十三歳から十七歳までの心理的発達課題と主人公の行動、思考過程を比較する。四年の間に主人公キキは思春期から青年期の初めに達したが、この時期の心理的な発達課題とし

ては、自己の確立、親からの身体的・精神的・経済的自立、女子固有の課題として女性性の受容とそれに伴う葛藤が存在する。キキはそれらの課題をどのように解決し、周囲の人々はどうのような支援を与えたかについて考察を行なう。

### II、作品の成立

第一作『魔女の宅急便』は、一九八二年四月号より一九八三年三月号まで、雑誌『母の友』に連載されたものをもとに加筆訂正され、一九八五年単行本化された。国際アンデルセン賞国内賞、野間児童文芸賞、小学館文学賞、JBYオナーリスト文学作品賞などを受賞している。しかし、一般に広まったのは、一九八九年スタジオジブリによってアニメ化されたことによる。アニメと原作とは、内容は多少違っている。そこで、第四作までの内容を簡単に述べておく。

第一作は、主人公の自立の始まりと定住の町を見つけるまでの一年間。第二作は生き方のよりどころの発見。第三作は思春期の終わりを迎え、生き方の決算。第四作は母からの完全な精神的自立とパートナーの発見である。魔女の成長物語というより、ひとりの少女が女性へと成長する姿を讀取ることができる。

作者、角野は、魔女について歴史的、社会学的、民俗学的に調べ上げた資料に基づいて作品を作り出したのではなく、当時中学生だった娘の書いた魔女のスケッチからヒントを得て主人公のキャラクターや作品のプロットを作り出した。「その絵は、魔女の定番そのもので、黒いマントを

着た、驚鼻の魔女が後ろに猫を乗せて飛んでいる絵だった。でもほうきの形が少し違っていた。ほうきの房にはお下げがみのような三つ編みがまじって、先に結ばれたリボンが、かぜになびいていた。また、ほうきの柄にはラジオがつるされていて、そこからマンガの吹き出しのように音符がとびだしていた。<sup>(一)</sup>

つまり、魔女という存在について、もともと興味関心があり知識をもっていたのではなくたまたまインスピレーションの沸いた主人公が魔女だったのである。作者の関心は、魔女ひとりの少女が親から離れ自立していく過程にあり、外見や職業はそれぞれ違っても個人の成長の本質は変わらない、という部分に、ポイントが置かれている。しかし、魔女という主人公を設定する以上、魔女に不可欠な要素は盛り込まれ、それが主人公の行動や性格を決定付ける要素となっている。

### Ⅲ、キキのもつ魔女の特質

#### (一) 魔女とは

角野は魔女の伝統を踏まえ、時代が変わればどのように変化するかを考慮しながら、主人公キキの性格設定を行なっている。

魔女の一般的な特徴として、「豊穣と死をつかさどる太母神につかえた巫女の末裔。太母神が従者に与えたさまざまな力をもっている。星の位置や月の軌道を妨害する、風を支配する、植物、特に草についての知識がある、姿を変ええる力を持つ、予言や占いをする、軽いので空を飛んだり、飾に乗り海を航海するなど」<sup>(二)</sup>挙げられている。歴史的には、「父性宗教である一神教のユダヤ教が生まれ、その後キリスト教が拡大していく過程で抑圧されていった存在である。女性の持つ力や神秘性の中から不安や恐怖、

畏れに焦点が当てられ「魔性」「邪性」が強調されたものである。「魔女狩り」のことが示すように、「魔女」は日常社会から逸脱したものを示すことばとしても使われている。社会の大多数を占める人々の抱えている問題を解決するための生贄として使用されていたのである。<sup>(三)</sup>

作品中のキキが与えられている魔女としての力は、従来の呪術的な力ではない。ほうきに乗って空を飛ぶことと後に習得するくしゃみ葉の知識だけである。角野は、「魔女」と呼ばれた女性たちが持っていた、「生命そのものの存続が危ぶまれた時代に、女達が自然の生命力に助けを求め、草を採集し、工夫をめぐらし生活に取り込んでいった」<sup>(四)</sup>姿を現代的に納得できる形に作り変えたのである。つまり、宅急便という仕事を通じて、物を運ぶだけでなく人の心を運ぶ。見えないものを運ぶことで自分の魔法を形あるものにしてしているのである。

#### (二) 魔女猫、ジジ

魔女と黒猫は切り離すことのできない関係のように受け取られ、作品にはジジという名前の黒猫が登場する。

動物の形をして魔女に超自然的な力を貸す小鬼とみなされる動物にはネズミ・ヒキガエル・蜘蛛・リス・ペットの猫があった。魔女の象徴として猫が扱われるようになったのは、飼い猫が一般化した十六世紀以降といわれている。また、古代エジプトでは猫は神として扱われ、光と闇をつかさどると考えられていた。光と闇という相反する性質をもつことから、猫は女神と男神両方の使いとなった。男性神ラーは月の神アーペプと戦うとき、女神イシスは、蛇やドラゴンと戦うとき猫に変身したという。また、死者の靈魂をあの世へ送り届ける使者と信じられていた。

猫が人間の日常生活の中で飼われるようになったのは古代エジプトとされ、目的は農作物に対するネズミの食害を食い止めるためである。同様に家畜化された犬に比べると束縛されることを嫌うため自由の象徴とされ、「九つの命をもつ」といわれることから長寿を意味し、予知力があることなども含めて魔術の良い側面をしめしているという。英国の民間伝承では、黒猫は幸運を白猫は不吉をあらわすという。また、黒猫が家に入って来たり船に乗り込んでくるのは良い前兆とされ、船乗りの妻は夫の無事を祈って黒猫を飼うのがよいとされた。(五)

「むかしから魔女には黒猫がつきものでした。これも一つの魔法といえるかもしれませんが。キキにもジジという名のちいさな黒猫がいます。コキリさんにもむかしはメメという名の黒猫がいました。魔女のお母さんは、女の子がうまれると、同じ時期に生まれた黒猫をさがして、いっしょにそだてていきます。そのあいだに、女の子と黒猫はふたりだけのおしゃべりができるようになるのでした。やがて独り立ちする女の子にとって、この猫はとても大切ななかまです。悲しくつても。うれしくつても、分かちあえる者がいることは、とても心強いことなのです。やがて女の子も成長し、猫にかわるたいせつな人ができ、結婚ということになると、黒猫も自分のあいてをみつつけて、わかれて暮らすようになるのでした。」(六)

「ふたりだけのおしゃべり」とは、自分自身の心の中にいるもうひとりの自分との対話を意味し、この対話を繰り返すことにより、キキはものごとを客観視できるようになり、自己の確立が行なわれる。

### (三) 飛ぶ技術とほうき

民間伝承では、ほうきは魔女にとって移動のための第一の道具であった。魔女はほうきにまたがり、猛烈な速度で空を駆けるのである。熊手が男性を象徴する道具であるのに対し、ほうきは女性の家庭生活の象徴であり、すべての女性が使う道具である。女性の習慣として、留守であることを周知させる手段として、戸の外に立てかけたり、煙突にさすことが行なわれていたという。飛ぶことのできる魔女が最も日常的な道具であるほうきにまたがり煙突から飛んでいくことは、信じるのが容易にできたことである。(七)「少女がほうきにまたがる」ことは、妻になるよりも先に母親になってしまふことを意味した。(八)

キキにとって、飛ぶ技術は唯一の魔力であり、母から伝授された魔女のしるしである。魔女として生きるか、普通の女性として生きるか、その選択は十歳のときに行なわれる。「自分に納得のできる選択をしたい」と考えているキキに、押し付けは禁物である。そんな時母親はほうきで空を飛ぶ経験をキキにさせた。

「コキリさんがあとをついでほしいと思っっていることはうすうす感じていました。でもキキは、かあさんが魔女だからあたしも、とかんたんにかんがえるのがどうも気がすまなかつたのです。(あたしは自分の好きなものになるんだ。自分で決めるんだ)。キキはそう思っていました。」(九)

「それは屋根よりたつた三メートルばかりのたかさでしたが、とてもいい気持ちでした。空気も、ほんのすこし青い感じでした。それに、もつと高いところを飛んでみよう、もつと、もつと……そしたら何がみえるかな、何があるかな、もつと、もつと……

とまるで身体と心をもちあげるようなふしぎな興味がわいてきて、たちまち飛ぶことがだいすきになってしまいました。そしてもちろん、魔女になる決心をしたのです。(十)

キキは、持ち前の主体性、好奇心を発揮させ、行き方の選択をし、十三歳の旅立ち（自立）の準備をはじめた。周りのことや自分のことに気を取られて落ちそうになつたりしながらも、飛ぶ技術は上達した。

また、飛び道具としてのほうきは、「宅急便」という仕事を可能にする道具であると同時に、母親からの庇護の象徴として作品中では扱われている。

自立の準備として、キキは自分で新しいほうきを作る。しかし、母親は以下のようにキキを諭す。

「慣れないほうきで飛んで、もし失敗したらどうするの。はじめがかんじんなのよ。ひとり立ちってね、そんなにかんたんなことじゃないんですから。」母さんのほうきで行きなさい。あのほうきならよく使いこんであるし、飛びかたもころえられているから。(十一)

「ほうきはおもちゃじゃありませんよ。いずれはこのかあさんのほうきもふるくなるでしょうよ、そうしたらキキのすきなのにしなさい。そのときはあなたも一人前になっているでしょうから(十二)

キキから見れば野暮つたい母譲りのほうきは、母の分身であり、安心感のよりどころであると同時に、共同体の中で徐々に受容され、承認を受けるまで自立の過程を支える有効な道具として使わ

れている。コリコの町で宅配便を開業し、町の人々に受け入れられる過程で、ほうきは、異性の介入による破損を受けた。キキは自力で修理し、不完全なほうきを乗りこなしてゆく。その後も『キキともうひとりの魔女』の、自己の確立の壮絶な場面では、乗りこなしたほうき（自己管理できるもの）として登場する。さらに『キキの恋』で母親との精神的な別れの暗闇の森場面で、ほうきは一時見失われる（キキが置き忘れる）など象徴的に使用される。

#### (四) 黒い衣装

「魔女の宅急便」の挿絵にも描かれているように、魔女は黒い長いドレス（マント）を着ていると思われている。しかし、従来、魔女には黒い衣服の着用は不可欠の記載は見られない。「黒衣は悪魔の服。悪魔の後継者である魔術師が着用している。」(十三)「魔女には白い魔女と黒い魔女の別があり、白魔女は、病気を治療し、うせ物を予言し、泥棒を探し出し、生殖を高め、そして悪天候を追い払うものであった。黒魔女は、その魔術を他人を害するためだけに用いる者であった。」(十四)が散見されるだけである。

これらの記述から言えば、黒い服を着た魔女は悪さをするのだから、一般民衆や社会から排除されても当然である。しかし、キキは黒いワンピースを着て魔女であることをアピールしながら、コリコの町へ溶け込もうとする。この黒いワンピースは自分で選んだものではない。キキは、旅立ちのドレスとして「コスモス色」のワンピースを希望するが、かなえられなかったのだ。その後も「魔女であることと普通の女の子の気持ちの揺らぎ」の場面で、花模様のワンピースなどが、象徴的に使われている。つまり、黒い衣服を着ることでほかの人との区別をつける、という意味では、見習い魔女の制服と扱われているのではないだろうか。その証拠

として、一人前の魔女である母親は、挿絵の中では普通の服装をして描かれている。一人前の魔女になるのが、結婚なのか、跡取りの魔女（娘）を産むことなのかは、第四作まででは不明である。

#### IV、キキの成長過程

ここでは、主人公の個の自立過程をもう少し詳しく追ってみることにする。

フロイト、エリクソン、ハヴィーガーストなどさまざまな研究者は、ライフサイクルにおける発達論を展開している。十七歳を迎える主人公にとって、ここまで達成すべき課題はどのようなものであろうか。個人の自立としては、身体的自立・経済的自立・精神的自立の三点に集約される。次の世代を生み出すという視点からは、将来の伴侶への展望と、ひとりの個人としていかなる人生を歩むかにかかわる未来図の作成が含まれる。

#### (一) 自立への助走「魔女の宅急便」

キキの魔女としての使命は、「魔法がまだ存在していることを知らせること、魔女の住んでいない場所に定住し、その地域の人々に受容されること」である。満月の夜に旅立ち、切り詰めればなんとか一年間暮らせるお金を親から与えられ、「自分の家を離れ、魔女のいない町で一人暮らしをする」生活が始まる。どこの町に住むかは本人の自由で、母親も見たことのない海に向かったキキはコリコの町に住む。出産を間近に控えたパン屋のおかみさんオソさんの好意でパン屋の片隅に住む場所を見つけ、「宅急便」をはじめめる。

新しい生活のスタートの基本手段となるほうきは、空を飛ぶこ

とに興味のあるとんぼさんにすりかえられたときに柄が折れてしまふ（五章 異性の介入による母親庇護の危機）。魔法のほうきではないほうきで海難救助を行ない（はじめての試練）、新しいとちの木のかあさんの作った古い房をつけ新しいほうきにする（六章 部分的母離れ）、なんとなくギクシヤクした動きをずるほうきにたいして「いずれにしる、あたしが自分で乗りこなさなくちゃいけないのよね」<sup>(五)</sup>と思い（自立の始まりの自覚）、自分をモデルにした絵を運ぶ、色とりどりの洗濯物を空に掲げ乾かすというような、たくさんの人に認められる仕事（六章 能力を承認される）、個人的な手紙をコツソリ覗いた挙句、紛失したことを正直に謝る（七章 自己の否定的側面の気づき）、町の人々のために、新年の訪れを人々に伝えるための時計を鳴らし、町の人々から感謝される（九章 自分の能力によって、共同体からの承認をえる）コリコの町に春の音を運ぶ（十章 町の中で欠くことのできない存在となった自信）などの自立の過程を支える道具としてほうきは使われている。

宅急便の対価を現金ではなく、おすそ分け（利益の分配、余分なものを分ける）の現物や自分ではできないことを代わりにしてもらうなどの行為で得る。親からの自立の一步ともいえる「一人暮らし」をはじめめるが、母親代わりの精神的な支えのパン屋のオソさん、いざというときに一年分暮らせる経済基盤もあり、身体だけ親から離れた状態である。オソさんをはじめ、キキの顧客は第一作の前半までは、すべて女性、それも仕事をもつ女性である。女性中心の集団の中でライバルも含めた同性の友人を得て、キキは精神的な成長をする。一年目の課題「自分の魔法で生きて、一年間で自分の行き方を見つめる」は果たして達成できたのか、大晦日の時計の鐘を鳴らし町長（共同体の権威者）から認められ、

春を告げる音楽を届けることによって、町の人から魔女としての自分が受け入れられたことを実感したときにも、達成感を実感していない。とりあえず里帰りをして、母親に再会したとき、やっとキキの心の中に自信と誇らしさが生まれるが、まだ、母親からの評価に頼っており完全な自立になっていない。キキの一年間は、母親とオソノさんなど母親的庇護の下に自立の助走をする一年であり、今後の支えとなる、同性及び異性の友人との出会いがあった一年間であった。

## (二) 自分らしさとは何か『キキと新しい魔法』魔女としてのア

### イデンティティとしてのくしゃみ薬

第二作では、仕事に対する疑問の解決と、魔女でよかったと思える自分をどのようにして捕まえるかが課題になる。「自分だけのできる魔法を見つきたい。」と思うキキのよりどころとなるのがくしゃみ薬である。そのとき、援助となるのは、魔女の先輩としての母の姿である。

「キキは目をこらしてコキリさんの顔を思い出そうとしました。目に浮かんでくるのは、楽しそうにくしゃみの薬をつくり、楽しそうにそれをほうきにつけて運んでいる姿ばかりです。ひさしぶりに手紙を書こう」

「キキ、お手紙、ありがとう。(略)それは、キキがものを運ぶだけでなく、たのまれた人の心の中まで、かんがえるようになったからじゃないかしら。それはキキが自分のことをしっかり考えるようになったってことだと思わ。(略)それより、かあさんは自分でまんぞくできるものをつくって、人によることでもらえないだろうかって、くしゃみの薬を作るようにした

のよ。つくってふしぎよ。自分がつくっても、自分がつくっていないのよ。」(中)

手紙の返事では明確な回答は得られなかったが、母親からもらっていたくしゃみ薬が町の人に役立つたのをきっかけにキキはくすりぐさの栽培と薬の製造をはじめた。

一般的な魔女が扱うハーブとは違う架空の名前がつけられている十二種類のくすりぐさを、しきたりどおりに栽培し、刈り取り、製造する。種を取る分は、十月の十五夜に一気に刈り取り、種類分けして乾かして保存しておく。

薬草とくしゃみ薬の製造は、最適の栽培場所を見つけることによって、さらにキキの魔女としての生き方を決定付けることになった。

「こんなおしゃべりを、草の手入れをしながら町の人とかわすのはさぞかし楽しいことだろうと思いました。宅急便を続けることもできます。それよりなにより、見れば見るほど、キキのころにぴったりの場所に思えるのです。鍵がかちりとあった、扉があいたような気持ちでした。」(中)

## (三) 自己の確立 『キキともう一人の魔女』

唐突に侵入してきた、年下の魔女ケケは、キキの行動を先読みし、イライラさせる。無作法に思えることを気持ちのままに行動するケケ。そのことを非難すれば、「いい子ぶって」とキキの気持ちはすつかり見通されている。自分のしよと思っていることをケケに横取りされることで、キキは自分の存在価値を疑い、生きる自信をなくしていく。三年暮らしたコリコの町は魔女としてのキキの生活すべてであった。しかし、ここにはもう住んでいる

ことはできない気持ちになったキキは、月明かりの中ほうきに乗って空高く上つていく。気づくとジジもほうきの尻尾にしがみついている。コリコの町が小さく見えるところまで上つたとき、これまでキキがコリコの町で経験したことがすべて思い出され、ケケの存在との重みの違いに気づく。ケケはキキ自身の否定的な部分を示すものであり、それを受け入れ乗り越えることによって、思春期までの生き方の中間決算が行なわれたのである。ほうきは急にまっさかさまに降り始める。キキの心のなかで思春期の終わりの扉が開き、これからの生きかたが示された瞬間に自己を確立することができたのである。

#### (四) 女性性の受容と葛藤、親からの精神的な自立、生涯続く自己変革 『キキの恋』

第四作では、異性の友人とんぼさんは遠くの町にある学校へ進学している。将来を約束したわけではないが、キキはものごとすべてをとんぼさんに合わせることに夢中になっている。

「女性性周囲にいる『重要な他者(夫・子どもなど)』によってそれまでに作り上げてきた自己を根拠ぎされてしまう可能性が大きい」(六)、といわれるがキキは気づかないうちに、自己を喪失する危機にはまり込みそうになっている。それに対して警告してくれるのが、ジジである。決断など、父性原理が要求される場合に、自分自身の中に父性原理を育てるようジジは警告しているのである。また、自分の本心を偽って無理に相手に合わせる事が本当の伴侶性ではないこと、つまり、精神的に自立したものが同士の生涯のパートナーになれることを料理人ペアに結婚式のベールを運ぶ行為(八章)でキキは気づく。

身近な生き方の目標としている先輩モリは、既に自分の店を経

営していたが、さらにスキルアップのため、弟をキキに預け料理修行に出かける。第四作では同様に、「大人の自分探しは一人で行なわなければならない」というテーマがさまざまな形で語られる。おとなの世界は子どもの世界とは別物であり、子どもは子ども同士で大人の助けは借りずに自分達の世界を作り出す。しかし、自己を確立した大人の自己変革は自分自身の力でやらなければならない。「大人はひとりで行くんだよ。」とモリの弟に言われる。また、仕事よりも遊び友達との約束を優先しなくなったキキは、魔法のしるし(母の分身)のほうきを見失って(置き忘れ)しまう。走り出したジジを追いかけ、闇雲に走り出したキキは、暗闇の森の中で、木の中から温かさを感じ取る(母からの離脱と母性の受容)。そのとき、生まれてはじめて飛んだ空の色を思い出し、魔法の明るい面にも気づくと同時に、自分自身の中に溜め込んでいた不満を冷静に受け止めることができたのであった。

自分自身の魔法(くしゃみ薬)で、母親の命を救ったキキの母親との関係はそれまでの一方的に保護される関係から対等な関係へと変化し、精神的な自立が完了する(母との精神的な完全自立)。その証拠に、母親から両親の出会いと結婚についてのいきさつを聞く。キキとんぼさんの将来がどのようになるのか定かではないが、周りの世の中が変わっていることを魔法への周囲の受け取り方の変化で示し、両親とは違った伴侶性が築かれることを読者に予想させている。

キキが自分を取り戻した、暗闇の森は、第三作目六章で家出したジジが出会ったキャベツ運びのノラオが「もう一度生きてみようか」と考えることができた場所である。「ノラオを捨ててノラオを拾う」ということばでノラオの自己変革を示す。同様の自己変革は中年女性にも起こりうることであることを若い頃に成功し





